



総研大ニューズレター

第117号 2018.4発行



目次

【今月のトピックス】

平成29年度春季総合研究大学院大学学位記授与式	広報社会連携係
企画室・教育開発センターを設置	広報社会連携係
総研大東京ランチがオープン	広報社会連携係
生命共生体進化学専攻 10周年記念シンポジウム	先導科学研究科事務係
第25回自然科学研究機構シンポジウム	核融合科学専攻
総研大・情報学専攻 第2回 Home Coming Day 開催	NII 広報チームデジタルメディア担当
学融合セミナー「カラスとどう付き合うか? ~対話、利用、個体数コントロール~」	学融合推進事務室総務係

【受賞情報、プレスリリース、メディア出演情報】

受賞1件、プレスリリース1件、メディア出演3件

【イベント情報】

総研大 各専攻イベント情報

【今月のトピックス】

● 平成29年度春季総合研究大学院大学学位記授与式について・学長式辞

3月23日(金)に講堂において、春季学位記授与式が行われ、課程博士50名。論文博士3名に新たに学位が授与されました。式典では、修了生一人一人に、長谷川学長より直接学位記が手渡され、学長からの式辞が送られました。53名の修了生が総研大での博士号を手にし、将来への新たな一歩を踏み出しました。学長式辞については本学ウェブページよりご覧ください。

学長メッセージ：https://www.soken.ac.jp/outline/president_message/



なお、今回の各専攻の修了生内訳は下記の通りです。

地域文化学 1名、国際日本研究 5名(内論文博士2名)、日本歴史研究2名、日本文学研究1名(内

論文博士1名)、構造分子科学3名、機能分子科学1名、天文科学4名、核融合科学1名、宇宙科学3名、素粒子原子核4名、統計科学4名、極域科学2名、情報学3名、遺伝学8名、基礎生物学6名、生理科学2名、生命共生体進化学3名 【広報社会連携係】

● 「企画室」「教育開発センター」を設置しました。

平成30年3月1日、総合研究大学院大学に新たな組織、「企画室」「教育開発センター」が設置され、それぞれが活動を開始しました。

「企画室」(葉山キャンパス共通棟1階)は、学長のリーダーシップによる大学運営を支援するため、全学の教育研究活動及び組織運営に関する企画・立案を行う本部の統括的機能の中核として設置されました。「SOKENDAI 将来構想プロジェクト」として第4期中期目標期間に向けた将来構想の策定を支援するIR活動及び、情報の収集を開始します。

「教育開発センター」は、これまで全学の教育・研究事業の支援を実施してきた「学融合推進センター」(平成22年4月1日設置、平成30年3月31日廃止)に替わるものとして、全学教育事業の実施・支援および教育活動・教育事業の評価・分析の支援に特化した組織として設置されました。教育開発センターは、総研大が東京に新たに設ける「東京ブランチ」(平成30年4月1日開設東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター)と葉山キャンパス共通棟別館2階(旧学融合推進センター棟)で活動します。【広報社会連携係】

● 総研大東京ブランチがオープンしました。

平成30年4月2日、SOKENDAI 将来構想プロジェクトとして東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター(CIC田町)に総研大東京ブランチがオープンしました。東京ブランチでは、担当



理事、教育開発センター教員、事務職員が常駐し、共同利用機関における大学院教育の現状と総研大の教育の実態をより客観的に把握・分析します。また、文科省、機構等法人、基盤機関とも密に相談・折衝を重ねながら、第4期中期目標期間における総研大のあり方を検討して、実現性のある「SOKENDAI 将来構想」を策定、さらには、その実現に向けた取組を実施するための機動的な活動拠点として活用されます。【広報社会連携係】

東京ブランチに看板を設置する長谷川学長(中央)、永田副学長・理事(右)、中村理事(左)

● 生命共生体進化学専攻 10周年記念シンポジウムについて



Gaut 教授講演の様子

先導科学研究科生命共生体進化学専攻は、本年度で設立10周年を迎えます。これを記念して、2月26日の午後から27日の昼にかけて、湘南国際村センターにて国際シンポジウム“Evolutionary Studies of Biosystems: History, the cutting edge and the future”を開催しました。本シンポジウムでは、本専攻の研究の特色を再確認するとともに、次の10年を展望すべく、本専攻に所属する教員の研究にゆかりのある、4名の著名な研究者を招待しました。

シンポジウムは4つのセッションから成り、各セッションでは、招待講演者の1時間ほどの講演の後、ホスト役を務める本専攻の教員がこれに関連する自身の研究成果について発表しました。各セッションの概要は以下のとおりです。

最初の「分子と進化(Molecular biology and Evolution)」セッションでは、ゲノム進化の発展に大きく貢献してきたカリフォルニア大学アーバイン校の Brandon Gaut 教授が講演を行いました。Gaut 教授からは、ゲノム進化の研究から明らかになった、様々な栽培植物の成立過程について、分かりやすく説明がありました。本専攻からは、宅野将平助教が登壇し、寺井洋平助教との共同研究であるシクリッドとマカクの種分化時に起きたゲノムの変化について発表しました。



質問に答える Nilsson 教授

続く「進化と行動(Evolution and Behavior)」セッションでは、スウェーデン、ルンド大学で視覚生態学と眼の進化を研究している Dan-Eric Nilsson 教授を招待しました。講演では、系統的に大きく異なる動物の眼を構造・機能・光受容物質について比較し、そこから考えられる眼の進化過程について、素晴らしい写真とともに紹介がありました。続いて登壇した本専攻の蟻川謙太郎教授は、アゲハチョウとショウジョウバエ複眼の発生機構を比較することで、昆虫複眼の複雑な色受容細胞構成を決める仕組みにせまる進化発生学的研究を紹介しました。



講演する Gilbert 教授

二日目午前の「生態と進化(Ecology and Evolution)」セッションでは、協力の進化理論研究の世界的第一人者であるウィーン大学の Karl Sigmund 博士が講演を行いました。講演の中で Sigmund 博士は、ヒトの特徴とは相互協力を達成するための社会や制度を自ら作り上げた点であることを強調されました。また、本専攻からは大槻久講師が登壇し、評判を介した協力メカニズムである間接互惠性に関し、理論モデルと実証実験の研究結果を発表しました。

最後の「科学と社会(Science and Society)」セッションでは、アメリカ、スワスモアカレッジの Scott Gilbert 名誉教授が講演しました。Gilbert 教授は発生生物学者として著名な方ですが、一方で科学と社会に関する諸問題にも関心をおもちであり、宗教学の学士号や科学史の修士号も取得されています。本講演では、近年の生物科学の発展が「個別性(individuality)」概念に与えてきた影響や、Gilbert 氏が長年実践してきた、実験室の中での「科学と社会」教育について解説されました。本専攻からは、飯田香穂里准教授が登壇し、科学が生み出しうる様々なタイプの「無知」について、科学技術社会論の知見や自身の最新の研究成果をもとに発表しました。

また、初日のセッションの後には、基調講演として長谷川眞理子学長が登壇し、Darwin 以来の進化の歩みや他分野への応用、また進化学と社会との関係について講演しました。

今回のシンポジウムでは、セッション間の休憩時間を十分に設けたことで、各セッションの講演について盛んな意見交換ができたほか、一日目夜に開催した情報交換会も大変盛り上がり、とても有意義な機会となりました。【先導科学研究科事務係】

● 第25回自然科学研究機構シンポジウム「プラズマが拓く無限の可能性」を開催

平成 30 年 3 月 11 日(日)、自然科学研究機構は、名古屋大学理学南館 坂田・平田ホール(愛知県名古屋市)において、第 25 回自然科学研究機構シンポジウム「プラズマが拓く無限の可能性～エネルギー、医療、産業、そして宇宙～」を開催しました。

核融合科学研究所が当番機関となって開催されたシンポジウムでは、小森 彰夫 自然科学研究機構長の挨拶の後、前半には核融合科学研究所 長壁 正樹 大型ヘリカル装置計画実験統括主幹から「プラズマ研究の拡がり、人工太陽への挑戦」、名古屋大学大学院工学研究科附属プラズマナノ工学センター 石川 健治 特任教授から「細胞を生かすプラズマ治療に向けて」、芝浦メカトロニクス株式会社研究開発グループ イヴァン・ガナシェフ 技監から「日常の電子機器を支えるプラズマ」と題した講演が行われました。

後半には、産業技術総合研究所ナノ材料研究部門 大矢根 綾子 主任研究員から「生体材料の表面機能を操るプラズマ技術」、名古屋大学宇宙地球環境研究所 草野 完也 所長から「宇宙プラズマの嵐から地球を守れ」と題した講演が行われ、核融合科学研究所 竹入 康彦 所長の挨拶をもって盛会のうちに幕を閉じました。

当日は、名古屋市内を中心に約 230 名の方が来場され、各講師によって紹介される最先端のプラズマ研究について、皆様熱心に耳を傾けていました。



講演者及び自然科学研究機構役員らによる記念撮影

また、会場では、核融合科学研究所をはじめとする、自然科学研究機構各機関のブース展示も行われ、立ち寄った人々は各機関趣向を凝らした展示に興味深く見入ったり、研究者らとの直接のやり取りを楽しまれたりするなど、閉場の時間まで賑わっていました。【核融合科学研究所 総務企画課】

● ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2018「持続可能な食の未来へ」

ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2018「持続可能な食の未来へ」が3月11日(日)、パシフィコ横浜にて開催され、本学 長谷川真理子 学長、大隅良典名誉教授(2016年ノーベル生理学・医学賞)が講演等を行いました。本シンポジウムには、ノーベル賞受賞者、ヨハン・ダイゼンホーフ博士(1988年ノーベル化学賞)、ティム・ハント博士(2001年ノーベル生理学・医学賞)、アダ・ヨナット博士(2009年ノーベル化学賞)らが参加しました。長谷川学長は、学位記授与式の学長式辞の中で本シンポジウムについて以下のように紹介しました。【広報社会連携係】

【学長式辞より一部抜粋】

『現状を変えて新しい境地を開いていくためには、ほかの人が考えないことを考えねばなりません。そういう新奇なことを考えつくには、何が必要でしょうか？ 先日、私は、ノーベル賞科学者数人を含む世界の研究者とともに「食の未来」を考えるシンポジウムに、一つのセッションのモデレーターとして参加しました。本学の基礎生物学専攻の教授でいらして2016年度のノーベル医学・生理学賞を受賞された大隅良典先生も参加され、基調講演をされました。このシンポジウムの最後に、ノーベル賞受賞者の方々に「創造性はどのように生まれるか？」を問うセッションがありました。が、誰も即答はできず、「どこから来るんでしょうね？」というのが感想でした。

しかし、話を進めていくうちに、いくつかの条件が明らかになってきました。一つは、「ある問題をずっと長く追究し続ける持続性」、もう一つは、「異なる分野の研究者たちの中でのオープンな議論」です。最初の持続性については、研究者個人のあり方がおおいに影響します。おもしろいと感じた問題にずっとこだわり続ける性格というか、持久力というか。目先の利益を超えて、自分が本当に追究したいことを追究し続ける力です。二番目の条件には、しかし、研究者個人のあり方に加えて、その研究者が置かれている研究環境がおおいに影響します。異なる分野の研究者たちの中でのオープンな議論ができるためには、研究者個人が、そもそも、異なる分野の研究者たちといろいろな議論をしたいと欲する人でなければなりません。しかし、そう欲する研究者がいたとしても、それが成り立つ研究環境がなければ、このような状況は実現できません。

研究はしばしば競争的な状況にあるので、他の分野の研究者と話をしている暇などない、外で自分の研究の話をするとアイデアを盗まれるかもしれない、などと考える研究者が多くを占めているような職場では、異なる分野の研究者たちの中でオープンな議論をする環境は作れないでしょう。そうすると、長期的に見て、そういう職場環境では、本当に新しいアイデアは生まれにくいということになりそうです。そういう研究環境は、短期的な競争にあくせくして、長期的なメリットを失う結果に終わるということです。私は、あのノーベル賞受賞者たちの議論に賛成です。

● 情報学専攻 第2回 Home Coming Day 開催

国立情報学研究所は総合研究大学院大学(総研大)に参画、複合科学研究科に情報学専攻を設置し、5年一貫制博士課程および3年次編入学博士課程の大学院教育を行っています。

本研究所では3月22日、昨年に続き2回目となるHome Coming Dayを実施しました。

Home Coming Dayは情報学専攻の修了者を対象にしたイベントで、今回は国内外から15名の参加がありました。



Home Coming Dayの参加者たち

イベントではまず、情報学専攻長である胡振江教授からあいさつがありました。胡専攻長は専攻の現状について紹介したあと、修了生に対し、「ここは修了生のホームである。気軽に訪れ、共同研究等を実施できるような場所と思ってほしい」と述べました。続いて、北本朝展 コンテンツ科学研究系准教授と蓮尾一郎 アーキテクチャ科学研究系准教授が、修了生に向け自身の研究トピックについてプレゼンテーションを行ったほか、3月末で博士課程を修了する新たな修了生3名が、それぞれ博士論文に関する研究を紹介しました。

その後、参加者は二つの会場に分かれ、現在自身が取り組んでいるトピックについて発表、議論を行ったほか、一部の参加者は学位授与記念メダル贈呈式及び優秀学生賞表彰式に参加しました。

夕方からはレセプションを開催し、参加者は教員や他の参加者らと親睦を深めました。レセプションの最後には、情報学専攻の副専攻長であり、イベントを運営した武田英明 情報学プリンシプル研究系教授が、情報学専攻の同窓会立ち上げを宣言し、胡専攻長が情報学専攻における第1期目の修了生でもある大向一輝 コンテンツ科学研究系准教授に対し、初代同窓会長の任命書を手渡しました。大向准教授は任命を受け、「この繋がりを大切にし、今後より活発なネットワークを作っていきたい」と述べ、イベントは和やかな雰囲気うちに終了しました。

【NII 広報チームデジタルメディア担当】

【国立情報学研究所 公式 Facebook ページより記事提供】

【引用元記事 URL : <https://www.facebook.com/jouhouken/posts/1671991512883467>】

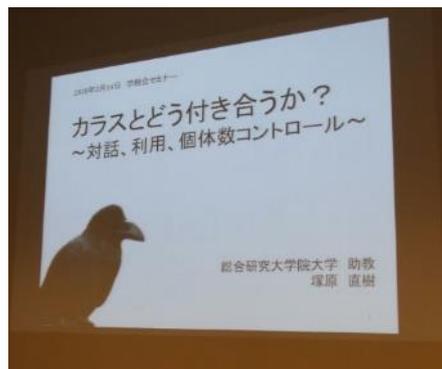
● 学融合セミナー「カラスとどう付き合うか?～対話、利用、個体数コントロール～」

平成30年3月14日(水)、学融合セミナーが葉山キャンパス共通棟2階講堂にて開催されました。講師は、学融合推進センター・塚原直樹助教で、「カラスとどう付き合うか?～対話、利用、個体数コントロール～」と題して講演が行われました。当日は学生、教員等、15名が学融合セミナーに参加しました。同氏の活動は各種メディアにも取り上げられており、多くの反響が寄せられています。

講演では、三浦半島におけるスイカやトムロコシへの農業被害、全国的にも鳥による農業被害の中でカラスによる被害が最も多いこと、送電線への巣作りなどにより、電力会社も大きな被害をうけていることが紹介されました。15年におよぶカラス研究の成果を活かし、カラスの性質、五感の特徴を知り尽くした塚原助教ならではのカラス被害対策が披露されました。カラスの鳴き声やドローン・カラスロボットを使ったカラス駆除というチャレンジングな研究テーマ、食料としてのカラス肉の活用等、塚原助教の研究成果を社会に還元したいという使命感が伝わる講演会

でした。

参加者からは、「嗅覚・味覚が鋭くないカラスが好物のマヨネーズをどうやって見つけるのか？」



カラスについて語る学融合推進センター・塚原助教

「古典籍研究とカラス研究のコラボレーションで分かることはないか?」「カラスロボットでカラスはだまされているのか?」といった質問があり、塚原助教の研究の様々な側面に高い関心が寄せられていました。

塚原助教はこの3月をもって、5年間所属した総研大を離れ、4月からは宇都宮大学でカラスに関するベンチャー企業を立ち上げます。引き続き、塚原助教の活躍が期待されます。【学融合推進事務室総務係】

受賞・プレスリリース・
メディア出演

受賞情報

○情報学専攻・学生・神保潮(五島研究室)

【受賞】情報処理学会 システム・アーキテクチャ研究会 若手奨励賞(第222回 研究発表会)

【受賞業績】逆方向カット・エッジのない最小カットを求めるアルゴリズムの改良

【関連 URL】<https://www.nii.ac.jp/news/award/2018/0313-2.html>

プレスリリース情報

○【再掲】『岐阜市長良で発見された鉄隕石、「長良隕石」と命名』

【メディア出演情報】本プレスリリースは、朝日新聞デジタル、毎日新聞、中日新聞、NHK、時事ドットコム、東海テレビニュース等、多くのメディアで紹介され大きな反響がありました。

【参考 URL】朝日新聞デジタル(3月1日)

<https://www.asahi.com/articles/ASL313T0SL31OHGB006.html>

【プレスリリース概要】

2012年10月ごろ、岐阜市内に住む三津村勝征氏(73)が、岐阜市長良宮口町で、褐色の鉄の塊を発見し、自宅に持ち帰りました。隕石ではないかと思い、2017年6月に知人で岐阜聖徳学園大学事務職員の岩佐大宣氏に相談し、同大学・教授・川上紳一研究室に持ち込みました。鉄隕石の可能性が高かったことから、東京大学・准教授・三河内岳、国立極地研究所・准教授・山口亮、首都大学東京・助教・白井直樹、総合研究大学院大学・助教・小松睦美に分析を依頼しました。分析の結果、鉄隕石であることを示すデータが得られたので、国際隕石学会の隕石命名委員会に隕石登録の申請を行い、「長良隕石(Nagara)」として承認されました。

【詳細 URL】<https://www.soken.ac.jp/news/41538/>

メディア等出演情報

○遺伝学専攻・学生・今井亮輔(生体高分子研究室 前島研究室)

【出演】ボイスキュー(FM三島函南)の「サイエンスNOW」の3/11放送回に出演

【概要】今井さんはこの春博士号を取得、森島奨励賞を受賞されました。放送では、大学院中の研究について、学生生活についてお話しされました。

【日時】2018年3月11日(日)

【URL】<http://777fm.com/blog/2018/03/311-now.html>

※番組内容は YOUTUBE にて公開中です。<https://youtu.be/ssofCfoQalk>

○遺伝学専攻・各研究室教員、学生・中澤信吾(形質遺伝研究部門 岩里研究室)、学生・飯塚朋代(遺伝情報分析研究室 池尾研究室)

【出演】4/7の遺伝研一般公開、及びボイスキュー(FM三島函南)の公開放送・収録

【概要】午前：番組名「weekend ナチュラル」 午後：サイエンス NOM 公開収録

【日時】2018年4月7日(土)

【URL】<http://777fm.com/>

○地域文化学専攻・教授・野林厚志

【出演】日曜美術館 NHK Eテレ(教育テレビ)「岡本太郎“太陽の塔”～井浦新が見た生命(いのち)の根源～」

【概要】開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ—70年万博収集資料」に関連して、野林厚志教授が出演しました。

【日時】2018年3月25日(日)

【URL】<http://www4.nhk.or.jp/nichibi/>

イベント情報

※今月号から、総研大専攻としての行事のみを掲載します。

○平成30年度春季入学式

【日時】2018年4月10日(火)

【場所】総合研究大学院大学葉山キャンパス 2階講堂

○平成30年度 総研大前学期フレッシュマンコース

【日時】2018年4月10日(火)～13日(金)

【場所】総合研究大学院大学葉山キャンパス

【概要】この度、平成30年度4月入学の新入生を主な対象に、合宿型の集中講義、総研大フレッシュマンコースを開講します。このコースは、次の2つのことを主な目的とします。第一に、研究者を目指すすべての人が身につけるべき技術・考えるべき問題を学ぶこと。第二に、総研大ならではの知的広がりに触れる中で、異なる分野の人とのつながりを築くことです。このコースは、「知のフロンティア」、「学生セミナー」、「研究者と社会」、「研究者のための“伝える”技術」の4つのセッションからなります。

【URL】https://www.soken.ac.jp/event/20180410_13j/

○一般公開・国立遺伝学研究所

【日時】2018年4月7日(土)

【場所】国立遺伝学研究所

【概要】国立遺伝学研究所では、毎年桜の季節にあわせ、構内を一般の皆様へ開放し、日頃の研究成果を公開しております。

【URL】<https://www.nig.ac.jp/koukai/koukai2018/>

○国立遺伝学研究所 大学院一日体験会

【日時】2018年5月26日(土)

【場所】国立遺伝学研究所

【概要】国立遺伝学研究所(遺伝研)では、「染色体・細胞」「発生・生殖」「脳科学」「エピジェネティクス」「進化・多様性」「ゲノム・大量情報」などのキーワードで、様々なモデル生物やデータベースを用いた最先端の研究をおこなっています。また、総合研究大学院大学

(総研大) 生命科学研究科 遺伝学専攻として、大学院生の教育をおこなっています。総研大のコンセプトは「優れた研究環境と人材を活用してトップクラスの研究者を養成する」ことです。遺伝研は、研究者を目指す学生にとって最高の研究教育環境を提供しています。大学院一日体験会に参加し、素晴らしい環境を体感してください。

【 URL 】 <https://www.nig.ac.jp/nig-daigakuin/nig-daigakuin2018/>

【お知らせ】

○4月以降の総研大ニューズレターについて

組織改編のため、2018年4月からは、企画室・総合企画課(広報社会連携係)が発行します。2018年度は4月・6月・9月・11月・2月の年5回発行(予定)です。

○新規ページの開設について～総研大ホームページにて各種情報発信中です。

『総研大ピープル』 <https://www.soken.ac.jp/outline/people/>

『卒業生の就職先・受験生へのメッセージページ』

https://www.soken.ac.jp/admission/student_activity/activity/

『総研大公式 Facebook ページ』 <https://www.facebook.com/SOKENDAI/>

総研大公式 Facebook フォロワー数カウンター	2017年 12月末	2018年 1月末	2月末	3月末
	70人	86人(+16人)	97人(+11人)	116人(+19人)

・いよいよフォロワー数 100 人突破しました！

・「#SOKENDAI」もはじめました。何気ない総研大情報も「#SOKENDAI」で発信をお願いします！

○広報特派員の募集について

広報社会連携係では、広報特派員を募集しております。総研大の広報活動にご協力いただける学生の方はぜひ応募してください。詳細は、下記 URL をご参照ください。

<http://www.soken.ac.jp/disclosure/pr/information/corres>

編集後記

学長補佐(広報社会連携・30周年事業担当)の田村克己先生と発行する総研大ニューズレターは今号が最後です。田村先生は、総研大ニューズレター2016年7月号から、紙面構成や校正、編集でお世話になりました。田村先生ありがとうございました。

広報社会連携係では、メディアを通じて総研大の研究成果を広く社会に発信しています。特に、総研大在学生在が筆頭著者として研究論文を出版する際、プレスリリースを行う場合は、総研大と所属専攻(基盤機関)との共同プレスリリースを行っておりますので、是非総研大広報社会連携係までご連絡ください。

各専攻の学生・担当教員の「メディア出演」、「受賞・表彰」および「地域社会と連携・密着したアウトリーチ活動等の社会連携・貢献活動」についてニューズレター、ウェブ掲載等により発信しておりますので、各種情報を是非お寄せください。

研究論文を投稿する場合や、メディア等に出演される場合は、「総合研究大学院大学」と表記いただきますよう、総研大の知名度向上にご協力をお願いいたします。

発行 2018年4月
編集



国立大学法人

総合研究大学院大学

SOKENDAI (THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES)

神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)

TEL 046-858-1590 / FAX 046-858-1632

Email [kouhou1\(at\)ml.soken.ac.jp](mailto:kouhou1@ml.soken.ac.jp)

※(at)は@に変換してください。

©2018SOKENDAI

